

子どもの遊び場における地域との連携

原子 純

Cooperation with an Area in Child's Playground

HARAKO, Jun

Abstract

Play carries body-like and the role important mentally for a child. But the environment that the backlash of today's child is surrounded is also changing into the play environment as well as decrease of "Mitsuma" such as space time and my group qualitatively quantitatively.

Promotion of child's sound upbringing in an area will become increasingly important from now on to make sure that the children can play with children of the different age also get a group together through play in the area. It's important for a local community to arrange the play environment of the child and secure an idle chance in a body.

It's because I do more exercise in a children's committee house clearly that however concerned that a children's committee house be by a local community from a case in a children's committee house in the small city by this research or that what kind of role is played again, and the state of the playground of future's child is considered

要 約

子どもにとって遊びは、身体的・精神的に重要な役割を担っている。しかし、今日の子どもの遊びを取り巻く環境は、空間・時間・仲間といった「三間」の減少とともに遊び環境は質的・量的にも変化している。

地域で子どもたちが異年齢の子どもたちと遊び、また遊びを通して仲間づくりができるようにするためには、地域における子どもの健全な育成の推進が、今後ますます重要になってきている。地域社会が一体となって子どもの遊び環境を整え、遊びの機会を保障することが大切なのである。

本研究では、S市の児童会館の事例から、児童会館が地域社会でどのように関わっているのか、またどのような役割を果たしているのか、さらに児童会館の課題を明らかにすることにより、今後の子どもの遊び場のあり方を考察する。

キーワード

子どもの遊び場 (Child's playground)

地域社会 (Local community)

異世代交流 (Different generation exchange)

1. はじめに

子どもにとって遊びは、身体的・精神的に重要な役割を担っている。しかし、今日の子どもの遊びを取り巻く環境は、空間・時間・仲間といった「三間」の減少とともに遊び環境は質的・量的にも変化している。特に、都市化の進行の著しい地域では、子どもたちが自由に遊べる屋外空間は限られ、貴重な子どもの屋外遊び場である公共の公園ですら、子どもが自由に安心して遊べる空間になっていない。S市の報告によると、「公園ではあるが、ボールなど思いきり体を使って遊べるところとなると学校のグラウンドしかありません。近くて思いきり遊べるスペースがほしいです」「公園が柄の悪い高校生のたまり場になっているそうです。怖くて遊べないと小学生の子どもが言っています」と市民の意見が寄せられた⁽¹⁾。

地域で子どもたちが異年齢の子どもたちと遊び、また遊びを通して仲間づくりができるようにするためには、地域における子どもの健全な育成の推進が、今後ますます重要になってきている。地域社会が一体となって子どもの遊び環境を整え、遊びの機会を保障することが大切なのである。

また、少子高齢化社会や都市化・核家族化の影響から、地域での人間関係の希薄化が社会問題となっている昨今、地域との関係も子

どもの生活には重要である。

S市では異年齢間での集団の遊びを通じて、地域における子どもたちの交流をより一層深めることを目的に、児童の健全育成のための事業をおこなってきた。S市の事業で注目すべき点は、地域の中での遊び場であるとともに、コミュニティの場でもあるという点である。特に、中学校区にひとつと比較的せまい地域ごとに設置されている。すべての子どもが自由に利用できる。ある程度の広さの遊び場が確保されている。遊びの支援をする大人が居るなど、現代の子どもたちの遊び場としての環境を構成していることである。

本研究では、S市の児童会館の事例から、児童会館が地域社会でどのように関わっているのか、またどのような役割を果たしているのか、さらに児童会館の課題を明らかにすることにより、今後の子どもの遊び場のあり方を考察する。

2. 児童会館が地域社会と連携をとる意義

青少年の人間形成には、家庭教育・学校教育・社会教育の三者が大きな役割を担っている（清水英男 2003 p.16-18）。三者がそれぞれの特色を生かしながら、自らの役割を果たすことができるよう、絶えず教育機能の充実を図ることが極めて重要である。しかし、三者が単独で充実するだけでは不十分である。

(1) S市「子ども未来プラン」より

なぜなら子どもたちは、日常的に家庭・学校・地域社会という生活の場を行き来しており、意識的にも無意識的にもこれら三者の総合的な影響を受けて人間形成がなされているからである。そこで、三者が相互に連絡しあい、提携・協力しあって新たな関係づくりや教育活動を創りだし、実践する必要がある。そこで三者を結ぶ拠点になりうる場所として児童会館があげられる。児童会館は、子どもたちが集まってくるところであるし、遊びの指導者もいる。かつ誰でも利用できるというオープン性もあるし、比較的身近な地域内に存在している施設だからである。つまり単なる子どもの遊び場のひとつではなく、地域社会における子どもの健全育成活動の拠点であり、館長・指導員を中心に、地域すべての人たちと協力して、子どもの健全育成をはかる機関となるべきところである。

しかし、当然ながら児童会館の中で、しかも館長・指導員だけで、地域の子どもの健全育成をはかろうとしてもおのずと限界がある。まず第一に遊びの指導者、健全育成の推進者としての館長・指導員の人数・能力の限界である。数名の指導員だけで児童会館に通ってくるすべての子に対して、遊び・イベントを通じての健全育成に関わることは、ほぼ不可能である。次に子どもの遊び空間の限界がある。S幌市の児童会館は、北区A児童会館の859平方メートルのように大きなところもあるが、だいたい平均500平方メートルである。そして子どもの遊び時間、利用時間の限界である。

こういった点から地域社会における子どもの健全育成は、地域に住むすべての大人が、その責任と義務をもっているし、地域社会の人たちが協力し、一体となって実施するのが望ましい。そこで各地域にあって、子どもたちが集まってくる児童会館を中心にして、そ

の体制を作る必要がある。その体制づくりのために児童会館の方から積極的に地域社会に向けてアプローチしていかなければならない。「遊びの情報基地」として児童会館は何ができるのか。現状として児童会館は地域社会とどのような取り組みを行い、どう結ばれているのか。

本研究では、地域社会を大きく、学校・家庭・地域（地域にある他の施設・人）の3つに分けて考えたなかで、地域との連携について、児童会館での聞き取り調査、参与観察をもとに考察する。

3. S市児童会館の地域連携事例

(1) 調査対象児童会館と調査方法

調査は、児童会館での聞き取り調査、参与観察を行う。本調査の対象は2児童会館であるが、必要に応じて、他の児童会館にも訪問し同様に、聞き取り調査、参与観察を行う。

S市において、児童館は、児童の校外生活において、異なった年齢集団での遊びを通して、地域における児童の交流をより一層深めることを目的とした、「児童健全育成施設」と位置づけられている。また社会教育施設のひとつと考えていて、そこで名称も「児童会館」としている。

児童会館の規模は、1982（昭和57）年度から、敷地1200平方メートルに建物480平方メートルを標準とし、敷地内容は、体育室、図書室、プレイルーム、クラブ室、事務室などである。また、児童会館は、就学前の幼児についても、保護者の方と一緒に遊んだり、子育てサークルの活動の場としても利用できる場としている。

なお、S市の児童会館をまとめて運営・管理を行っているのは、「財団法人S市青少年女性活動協会」である。

財団法人S市青少年女性活動協会は、1980（昭和55）年4月1日にS市の全面出資によって設立された財団である。前年の「札幌市青少年問題協議会」の建議にのっとった設立趣意には、『青少年にあっては、心身の鍛練に励み先人に負けない開拓精神をもって、郷土S市の発展に寄与するよう、また、女性にあっては、家庭教育の重要性を十分認識するとともに、ボランティア活動等を通して人情あふれる地域社会の確立に寄与するよう期待するところである』と記されている。つまり、財団によってグループワーカーの専門家を確保し、青少年の健全育成と青少年女性の社会参加の促進を図るという目的を持っている。活動協会は、グループという「小社会」での活動を有効に活用することで、参加した人々に受容と自己表現の機会を提供し、ひいては社会参加を促すべく活動している。設立当初は、グループ活動の指導者の養成や、キャンプ活動・レクリエーション活動等のプログラムの企画・指導等、全市的視野に立っての事業が主流であったが、次第に協会のグループ活動に関する手法とこれらの業績を評価され、現在では多くの青少年女性に関する諸施設の管理運営をS市から受け、社会教育・生涯学習的な側面から管理運営を行っている。

①SN児童会館

S市H区にあり、1988（昭和63）年に開館した。周辺の学校3校から子どもたちが遊びに来ている。その数は、平均して60から70人以上である。館長を含めて指導員の人が5名いる。館長がいないときなどは、代替わり館長として、元教員であるおじいちゃんが来る。ここの児童会館は、地域との交流事業を数多く行っており、地域に密着した活動を行っている。協力体制も取れていて、児童会館にある遊具は、ほとんど地域の人がくれたものである。また地域を越えた活動にも力を入

れている。

②KY児童会館

S市S区にある児童会館である。この地域は歴史のある街であり、古くからの住民が多く、したがってお年寄りが多い。1975（昭和50）年に開館している。体育館・図書室・遊び部屋・クラブ室・事務室があるが、地域の人も利用する「集会室」という、他の児童会館では見られない部屋がある。地域の老人クラブが毎週月曜日に利用している。そのようなことから、老人会との行事も多く、地域の幼稚園・老人ホームとの行事など、地域の人と一緒に子ども達が成長している会館である。館長1人、指導員2人の3名で指導している。来館者は地域の3つの小学校の低学年の児童の利用が中心で、高学年は決まった子ども達が多く、中・高校生は、2、3人の男子が来ているが、彼らは小学校のころから通っている。保護者が就労などの理由で昼間家庭にいない留守家庭児童のために、児童会館・ミニ児童会館で開設している、学童クラブがある。本児童会館全体で平均40名前後の子どもが遊びにきていて、そのなかで児童クラブに所属している児童は33名いる。学校から遠い会館ということもあるのか、来館者は少ないほうである。

（2）高齢者・障がい児との交流

K児童会館では、年1回子どもたちが老人ホームにプレゼントを持って訪れ、よさこいをやったり、一緒に遊んだりする「ふれあいデー」がある。1998年から行っている。館長は、「子どもたちが、身近にいる高齢者とふれあうことで老人をいたわる、またやさしい気持ちになっている」と言う。

著者が参与観察した日、歩いて20分くらいの同じ地域にある老人ホーム「K園」を折り紙で作った花を持って行って、訪れた。よさ

こいをやったり、一緒に歌を歌ったりして高齢者と一緒に楽しんでいた。子どもたちは「喜んでもらえてよかった」高齢者の方たちも「子育てを思い出す」「去年来たときよりも大きくなってうれしい」と述べていた。また、もちつき大会のときも老人クラブのおばあちゃんたちが15名ほど手伝いに来てくれていた。子どもたちに「こうおもちをちぎってまるめるんだよ」「しっかり腰を下ろしてもちをつかないと」と言った会話を楽しんでいた。

E児童会館でも庭の芝生を地域の老人クラブの人が年に2回刈りに来ている。そのときやお祭りなどのイベントを通じて交流を行っている。また地主さんが老人クラブに貸した市民農園の一部を児童会館に貸してくれ、そこでいもを植えたりと交流を行っている。

また児童会館によっては、地域に住む障がいをもった子どもも遊びに来る。地域の障がい児サポートクラブが放課後、障がいをもった子どもを集めて近くの児童会館に遊びに行くということもよくある。そのときにハンディキャップをもっていない子どもと一緒に遊ぶ姿も見られた。地域の公園にゴミ拾いに行ったときも車イスを押してあげる子どもがいた。また館内でも入る時にドアを開けてあげたり、コップに水をいれてあげたり、車イスに座っている子どもの体勢を変えてあげたりと子どもたち自身が気づいて動いている様子が見られた。

(3) 町内会との連携

S児童会館では、町内会の人と一緒に畑を耕している。毎週火曜日に「タッピーファーム」という名で活動を行っている。その畑では、ミニトマト・きゅうり・メロン・ダイコン・コメ・ジャガイモ・トウモロコシ・ヒマワリなどを育てている。そこの畑で採れたも

ので収穫祭をして、地域の人と交流している。また町内会の回覧板に会館だよりを入れてもらうといった児童会館を広める協力体制もできている。

K児童会館でも、もちつき大会といった行事のときに町内会会長の人がお手伝いをしにきている。

(4) 地域の人とのふれあい

自分が生活をしている地域内には、実にいろいろな人が住んでいる。もしかしたら、伝承遊びの達人がいるかもしれないし、スポーツのプロがいるかもしれない。そういう人たちと子どもを引き合わせることも児童会館の役割である。

SN児童会館では、「フロンティアフィールドクラブ」という名称で毎月第1金曜日は、地域のおばさんが来て、昔話をしてもらったり、伝承遊びをしたりして活動している。このおばさんは昔話の達人で、本を読んで聞かせるのではなく、すべて話が頭に入っているというすごい人である。また第3金曜日は「エコクラブ」として、地域のゴミ拾いを行っている。H区役所から地域に住む「おもちゃクリニック」のおじさんを紹介されたこともある。第4金曜日は「リズム遊びクラブ」である。これは、地域に住む音楽セラピーの人やジャズバンドを組んでいる人が来て、子どもたちと一緒に楽器を使って遊ぶ日である。さらにここの児童会館は、会館だよりやイベント告知ポスターなどを子どもたち自らお店などに行き張ってもらっている。新しい店などにも「張ってくれるかなー」などと言いながら自分たちで地域に出て、交渉している。地域のお祭りにも積極的に参加し、今年はおうちわを作って、それをまつりに来た地域の人に配ったり、それを使って盆踊りを踊ったりとふれあう機会を多く設けている。

KY児童会館では、「やよい祭りだ ワッセッセ！」というお祭りを行った。児童会館全部を使って、食べ物のコーナーや的当て、わなげ、ヨーヨーといった遊びのコーナーなどがあり、各コーナーをスタッフ役の子どもとお手伝いの保護者、地域の大人が担当した。子どもは全体で100人以上が来場し各コーナーで遊んでいた。

筆者が特に注目したコーナーは「かみひこうき」のコーナーであった。紙を飛行機型に切り取って、折り、最後におもりをつけて飛ばすというものだった。友達同士で飛行距離を競ったり、小さい子どもに対して「こう折るんだよ」と教えてあげる姿もみられた。また体育館でビンゴ大会が開かれ、大変盛り上がった。子どもたちが遊びやビンゴ大会を通じてコーナーを担当している地域の人と会話をし、一緒に楽しんでいるイベントであった。

T区YK児童会館では、地域の商店街で行われたお祭りにも参加した。児童会館としてもひとつの店を出し、その店も子どもたちが企画して、また子どもたち自身で接客をして、地域の人と交流を図るというものだった。「地域の人、子どもに楽しんでもらおう」と低学年、高学年から15名ずつ参加した。当日も中高生が、「手伝うよ」と言って手伝っていた。店は、かたぬき、的当てといったゲームコーナーで、各ゲームの合計点で商品がもらえるといったものであった。実際に、接客をした子どもは、「楽しそうだ、やってみようと思って参加した。やる前は簡単だと思っていたけど、実際にやってみたらお客さんがいっぱい来て大変で、疲れた」と感想を述べていた。商店街実行委員会の人「商店街も子どもの成長を見ながらやっている」「子どもたちが中学生になっても戻ってくるような商店街、祭りにしたい」と語っていた。子ども、商店街、町内会そして地域の人を結ぶ

大きなイベントになっている。

4. 地域社会内の子どもの実態

子どもは家庭と同様に地域の大人とのふれあいや多様な経験を通じて社会性をはぐくみ、人格を形成する。しかし讃岐幸治（2003 p.124-125）によると、最近の子どもは、3つの「たいりょく」が不足していると言われていた。1つは、身体的な「体力」不足である。転んではすぐに骨折するとか、学校の朝礼で5分間の程度でも立って話しが聞けない子どもが増えている。2つめは、「忍耐力」の「耐力」である。欲望を抑えて我慢するということができない。自分の気に入らないことがあるとすぐにキレる。こんな子どもが増えている。3つめは、連帯力の「帯力」のなさがあげられる。自分に関係するもの、関心のあるものは受け入れるが、そうでないものは排除する。他者とうまくかかわれない子どもが増えている。

どうしてこうなったのか。その大きな要因として地域の教育力の低下が考えられる。かつての地域社会では、人間形成空間として機能していた。例えば地域の仲間と遊びや地域行事などに参加するなかで、時にはケンカしながら、たくましさや我慢することを身につけた。弱い物いじめでもしたら、近隣の大人に怒られたし、ふざけていたりすると「まじめにしろ」と叱られたりして。地域の人たちとのいろいろなかわりのなかで、挨拶をしたり、3つの「たいりょく」も身につけた。多くの地域の多様な人々とのかわりや共同作業を通じて、子どもは育てられていた。

矢野峻（1981）によれば、地域の教育力の低下として地域の共同性が衰退し、それを基盤として生まれていた社会規範が低下した。地域ぐるみで子どもの行動や意識を見て、子

どもを地域全体で育てあげていこうということができにくくなった。また情報化・都市化が進み、生活の地域性が薄まったことで、地域を基盤としての多面的な「生活体験」の機会が少なくなってしまった。

さらに現代の地域社会の大人は子どもたちに声をかけず、子どもたちも地域の大人にモデルを見いだせない現状がある。全国の小・中・高校生を対象とした調査研究⁽²⁾によれば、近所の大人から注意されたり、叱られた経験が「あまりない」あるいは「ない」と回答するものがいずれの学齢でも7割を超えた。同様に全国2000人の成人を対象とした調査⁽³⁾でも、地域の子どもの叱った経験のない者は全体の6割強を占めた。大人自身も叱る経験のなさを自覚している。

さらに先ほどの全国の小・中・高校生を対象とした調査では青少年に、身の回りに「あのようにになりたい」と思う大人がいるかを問い、地域における子どもの視点から見たモデルの存在を明らかにした。その結果学齢の上昇とともに「になりたい」大人がいる者の割合は減少し、さらに「になりたい」と思う大人はいないが、「なりたくない」と思う大人はいると答える割合が中学生で20パーセント、高校生では23パーセントに上がることが明らかになった。そのように地域の子どもは大人とのふれあい自体も少なく、さらに理想とするモデルを身近な大人に見いだせない実態が浮かび上がってくる。

このような調査結果から、地域内のつながりがうすくなっていることがうかがうことができる。こういった状態では子どもが地域の人を、地域の大人が子どもを相互認識するこ

とができない。地域の大人が子どもに対して関心を持ち、積極的に声かけをおこなうことで子どもの意識も変わるのではないかな。

5. 児童会館が地域社会で果たす役割

子どもは、周りにいる大人に声をかけてもらうことで、「自分は見られている」「気にかけてられている」という意識をもつ。KY児童会館の高齢者とのふれあいで高齢者の方が「去年来たときよりも大きくなっている」と述べているが、確実に地域の人は子どもたちを見ているのである。それなのに見て見ぬふりをしてはいけない。この言葉を言われた子どもは、自分は見られているんだということに気づくだろう。この安心感や意識が子どもたちを成長させていく。非行の防止にもなると思う。「自分は見られている」「見守られている」という意識があれば、悪さをしようという気にはならないだろう。

なぜ地域の大人は子どもに対して「おはよう」「お帰り」でもいい、声かけをおこなわないのか。それはやはり、子どもに対する無関心が大きな要因になっているのではないかな。地域にどんな子どもがいるのか分からないから興味を持ってない。家庭同士の連携不足、学校ではそこまで情報を教えてくれない。といった原因もあるが、やはり相互認識不足が最も重要な問題である。

児童会館が地域に向けて子どもたちの活動をアピールしていることは、地域内の大人が子どもを、子どもが大人を知るという点で非常に意義がある。特に地域のお祭りに参加す

(2) 2000年1月文部科学省統計数理研究所内世代間交流活動研究会編「青少年及び高齢者の異世代交流に対する意識調査報告書」による。

(3) 2000年3月文部科学省統計数理研究所内世代間交流活動研究会編「世代間交流に関する意識調査報告書」による。

るということは、不特定多数の人に子どもを知ってもらうことができる。そこで子どもたち自身が店などを設けて地域の人とコミュニケーションをとり、交流をする。そこで相互認識が生まれる。今度は道端で会話が交わされるかもしれない。またSN児童会館ではビラや児童会館便りを子どもたち自ら地域に出て張りにいく。また張ってもらえるように交渉する。ここでも確実に地域の人に対して存在をアピールできるし、地域の人との会話も発生する。児童会館が地域の人と子どもをつないでいるのである。

児童会館は地域の人をつなぐだけではない。町内会や行政、ボランティア団体といった地域内の組織と子ども、保護者を結んでいる。子育てサロンと通じて、また子育て支援を通じて結ばれている。またSN児童会館では、区役所側から「キャンドルナイト」と一緒にやりませんかという提案があった。このイベントで子ども・地域の人とともにキャンドルホルダー作りをした。行政と市民がつながったイベントである。さらに青少年科学館の人が移動天文台を持ってきてくれて、みんなで天体観測をおこなった。ここでも児童会館を通じてのつながりが見られる。

S区のKK児童会館の「スノー&アイスキャンドル大作戦」のときのように、地域の方から「もっと盛大にしよう」という意見も出た。こういうところからも地域住民の人が児童会館の行事に大きな興味をもっていることが感じられる。

児童会館の活動が、子どもと学校、子どもと親、地域住民をつないでいるのである。児童会館が子どもと地域社会をつなぐ大きな懸け橋となっている。

児童会館の活動に参加する人、しない人がはっきりと分かれてくると、同じ地域社会の中でも温度差が生じてくる。

あるイベント終了後に町内会長が「もっと親にも参加してほしい」「半年に一回くらいの大きなイベントだったら、予定を空けて来てほしい」「町内会としても当然協力していくが、まず親ありきなのではないか」といった意見を言っていた。親のお手伝いが全くなかったというわけではないが、もっと多くの親に来てほしいというものだった。

こういった状況を解決するために、強制的に親や地域の人を参加させるといった方法では、長続きしない。なかなか遠慮がちで人付き合いが苦手な人や親にも来てもらえるような「より開かれた児童会館」を目指していく必要がある。そのために児童会館として親同士、地域住民同士が話し合う場を数多く設けることをしなければならない。

児童会館活動を見ていく中で問題点・課題が出ていくことがわかった。しかしそういった数々の課題に対して、児童会館の指導員だけで解決策を模索していても到底解決には至らないだろう。彼らを筆頭にして地域社会みんな考えていかなければならない。

児童会館が今後も地域社会と連携した活動を行っていくためには、より地域に密着した、地域に根ざした活動を行う必要がある。そのために一度作ったつながりを切れないようにしていくことが大事である。つまり一度だけイベントにきてもらうとか、一回だけ話しを聞きに行くというのではなく、継続的に関係を持ち続けていくべきである。一回だけでは、よく理解できなかったり、また一回体験した、調べた時点で興味をもった子どもや、さらなる疑問をもった子どもがいるかもしれない。そういった子どもに対して、さらなる機会を与える必要がある。

SN児童会館の館長も「H区役所からエコクラブの一環で地域に住むおもちのクリニックのおじさんを紹介してもらった。子ども

たちもとても喜んでいて。これが、今回だけで終わらないで、引き続き連絡を取り合って、また来てもらうようにしたい」と述べていた。同児童会館では、先に述べた全館共通イベント「ごみゼロ」時に館内でごみクイズやゴミに関する展示をした。その後、ごみの行方が気になり、ごみ収集車が来たときに聞き、後日「ふしぎリサーチゴミの大捜査線」というイベントを行い、清掃工場の見学に子どもたちを連れて出発した。さらにそこからリサイクルという考えに興味に移り、リサイクル行事として、牛乳パックを使ってはがき作りをした。そしてそのはがきが本当に届くのかということで、実際に郵便局まで子どもたち自ら持っていった⁽⁴⁶⁾。

児童会館を通じて子どもと地域に住む大人、地域にある施設、地域を越えた交流を何回も何回も行う。地域施設、住民も自分たちが必要とされている、自分たちが子どもの成長に役立っていると感じることができれば、より積極的に関わりを持とうとしてくるだろう。こうした動きがゆくゆくは地域全体の活性化につながっていくのだ。児童会館がより地域に根ざした太いパイプを作ることの意義として、地域全体の活性化も考えられる。

地域社会により根ざした児童会館を目指して、地域にある施設・人財を生かして、何度もつながりをもっていくことが大事だと考えた。それが地域社会全体の活性化にもつながっていく。これらを踏まえ、これから児童会館は、地域内でそのような存在であるべきなのか。

児童会館が子どもと学校、子どもと保護者、子どもと地域というように子どもと地域社会との連携が重要なことは明らかである。地域の子どもの情報発信基地、遊びの情報発信基地として機能している。さらに地域を越え、普段出来ないような体験を子どもたちに

もたらしている。こういった取り組みは、今後より強い連携を取って続けていくべきである。この際、指導員があらかじめ用意したものを、ほんのわずかな時間子どもたちに関わらせ、自ら仕上げた感じにさせるだけではない。児童会館は、単なるイベント屋ではないのだ。子どもの創造力を伸ばすために、どうすればいいのか日々検証すべきだ。

さらに今後、屋外での活動がメインになるように活動の展開を図るべきである。屋外であれば、地域社会・住民は子どもの様子、活動をよく見ることができる。これによって子どもたちも地域社会を意識することができる。屋外から地域へと活動展開を広げていくことが重要だ。

児童会館は、もはや子どもたちのためだけの施設ではない。地域に住む人みんなの施設である。児童会館が子どもたちに対して行ってきた遊びを、子どもという枠を超えて、地域社会全体で共有していくべきである。児童会館が子どもたちだけでなく、地域住民の余暇時間を充実したものにさせる施設となるべきであろう。そしてゆくゆくは、遊びを超えて、地域住民の生涯学習の場として機能していくべきであろう。

6. おわりに

本論文では、児童会館と地域社会がどのように関わっているのか、その現状を見ていく中で、S市の児童会館が地域社会でどのような役割を果たしているのか、また児童会館の活動が地域社会にどのような影響を与えているのか、さらには児童会館が抱える課題や問題点を明らかにすることを目的とした。そこからこれから児童会館がめざすところを考えた。

地域の取り組みの事例の中で、児童会館が

子どもと地域社会の連携の重要性が明らかであった。また、児童会館の地域を越えた活動について見てきた。それらの活動が、児童会館の存在をより広い範囲に広め、また子どもたちに日常生活では味わえないかけがえのない体験をもたらせている。また自ら考え、自ら行動できる自発的な子どもの成長に一役を担っている。児童会館の活動では、課題や問題点もあるが、今後の社会では、児童会館は重要な役割を今以上に担うことも想定でき、それらの課題等適切に対処することも急務である。さらにこれからの児童会館のめざす活動として、より多くの人に存在を知ってもらうためにメディアを使った広報活動、より地域に根ざした活動を行うために施設・人財と繰り返しつながることでの太いパイプラインの形成も必要である。

最後にこれからの児童会館像として、子どもだけでなく、地域住民すべての余暇時間を充実させるための活動を行い、また将来的に地域住民の生涯学習の場として機能していくことが期待される。

SN児童会館館長によると、児童会館の仕事には際限がないという。手を抜こうと思えば、これほど楽な仕事はないらしい。これはとても印象的な言葉であった。やはり、人対人のつきあいである。こちらがいくら熱心によっても反応がない時だってあるだろう。しかし、児童会館は地域社会に対する働きかけを止めてはならない。児童会館活動が活性化すれば、地域社会も活性化してくるのだから。地域社会が活性化すれば、子どもたちだ

って生き生きしてくる。児童会館の果たすべき役割は大変大きい。

最後に、本研究では、著者の参与観察と館長への聞き取りといった児童会館を運営する側からの調査が中心である。児童会館を活用して遊んでいる子どもたちの意見・思い十分に反映されていないのが課題である。今後は、本研究を基にさらに児童会館を活用して遊んでいる子どもたちの意見・思い十分に反映されていきたい。さらには、地域の方々の聞き取りも含めた研究に発展させていきたいと考えている。

引用・参考文献

- 伊藤俊夫編『豊かな体験が青少年を育てる』財団法人全日本社会教育連合会、2003。
- 清水英男「学者融合の展開—重要さが増す学校と社会の融合—」伊藤俊夫編『豊かな体験が青少年を育てる』財団法人全日本社会教育連合会 2003 16-18頁
- 讃岐幸治「地域教育力 その典型的結実—祭りや年中行事が子どもを育てる—」伊藤俊夫編『豊かな体験が青少年を育てる』財団法人全日本社会教育連合会2003 124-125頁
- 鈴木雄司「子供と地域をむすぶ児童館」住民と自治 96(9) 1996 32-36頁
- 平野吉直「いま、子どもたちの体験は—青少年の体験の実態とその影響—」伊藤俊夫編『豊かな体験が青少年を育てる』財団法人全日本社会教育連合、2003 11-15 頁
- 矢野俊『地域教育社会学序説』東洋館出版 1981
- 渡部平吾『子どもの心を育てる学童保育と児童館』ごま書房 2004